

宮脇第2遺跡

2003

宮崎市教育委員会

序

私たちの宮崎市には、様々な文化財があります。平成14年10月28日付けで新たに市指定の文化財を2件追加しました。それは、『下北方地下式横穴5号出土品』一括と、『下郷遺跡出土絵画土器』で、宮崎市では初めての考古資料の指定文化財となりました。この指定により、宮崎市内の文化財は市指定19件となり、国指定13件、県指定18件と併せて50件になりました。

今回の指定は、発掘調査によって出土した貴重な文化財であり、『下北方地下式横穴5号出土品』では金製垂飾付耳飾や刀剣、馬具類など多彩な副葬品が一括して指定されました。また、『下郷遺跡出土絵画土器』は弥生時代の土器に様々な絵画が線刻されており、当時の人々の精神文化を解明していく上で貴重な史料です。

近年都市開発が進んでおり、宮崎市でも各地域で開発が行われております。その開発に伴い、発掘調査を行った結果、私たちの祖先がこの宮崎の地で営んできた生活の一端を見出すことができています。

今回の宮脇第2遺跡発掘調査は、更生保護施設「みやざき青雲」の改築に伴うもので、古墳時代の集落跡が確認されました。周辺には浄土江遺跡・大町遺跡などがあり、これらの遺跡と共に、今回の調査結果がこの地域の古代史を解明していく手掛かりになるものと思われます。

最後になりましたが、発掘調査に御配慮、御協力いただいた更生保護法人みやざき青雲の方々、また発掘調査に従事していただいた作業員の皆様方に心より感謝申し上げます。

平成15年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫

例　　言

1. 本書は更生保護施設改築に伴う、宮脇第2遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成14年9月17日から11月14日までの期間実施した。

3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

文化振興課	課長	小掠　聖
調査総括	文化財係長	永井　淳生
調査事務	主任主事	今井　智美
調査担当	技師	宇田川美和
	嘱託	門田奈津子
整理担当	主任技師	稻岡　洋道
	技師	宇田川美和
	主事	仁尾　忠尊
	嘱託	門田奈津子
補助員	嘱託	椎　由美子 佐藤小夜子 緒方　吉嗣 遠田　容子

4. 本書の執筆は宇田川が行った。
5. 掲載図面の実測・製図・図版の作成は宇田川・仁尾・門田・椎・佐藤・緒方が分担して行った。
6. 現場での写真撮影は宇田川・門田が行った。遺物写真撮影は稻岡が行った。
7. 本書の編集は宇田川が行った。
8. 発掘調査により出土した遺物、及び調査に伴う図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。
9. 本書において、特に記述のある場合を除き、遺構はS=1/60（但し、竈・埋甕はS=1/30）、遺物はS=1/3で掲載している。また図版中の [] は搅乱である。

本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2章 調査の成果	
第1節 調査の概要	6
第2節 壴穴住居の調査	7
第3節 土坑の調査	17
第4節 溝状造構の調査	18
第5節 ピットの調査	18
第3章 まとめ	19

挿図目次

第1図	遺跡の位置とその周辺	4
第2図	宮脇第2遺跡全体図 (1/80)	5
第3図	宮脇第2遺跡基本層序柱状図	6
第4図	1号・6号住居実測図	7
第5図	1号住居埋甕実測図	7
第6図	1号住居出土遺物	7
第7図	2号住居実測図	8
第8図	2号住居竈実測図	8
第9図	2号住居埋甕実測図	8
第10図	2号住居出土遺物	8
第11図	3号住居実測図	9
第12図	3号住居埋甕実測図	9
第13図	3号住居出土遺物	10
第14図	4号住居実測図	11
第15図	4号住居出土遺物	11
第16図	5号住居実測図	11

第 17 図	5号住居出土遺物	11
第 18 図	7号住居実測図	13
第 19 図	7号住居竈実測図	13
第 20 図	7号住居出土遺物	14
第 21 図	8号住居実測図	15
第 22 図	8号住居出土遺物	15
第 23 図	9号住居実測図	16
第 24 図	9号住居竈実測図	16
第 25 図	10号住居実測図	16
第 26 図	10号住居出土遺物	16
第 27 図	1号土坑実測図	17
第 28 図	1号土坑出土遺物	17

図 版 目 次

図版 1	宮脇第2遺跡全景	23
図版 2	1号住居埋甕検出状況	24
図版 3	1号・6号住居完掘状況	24
図版 4	2号住居埋甕検出状況	24
図版 5	2号住居埋甕検出状況	25
図版 6	2号住居完掘状況	25
図版 7	3号・7号住居完掘状況	25
図版 8	3号住居埋甕出土状況	26
図版 9	7号住居竈検出状況	26
図版 10	4号住居完掘状況	26
図版 11	5号住居完掘状況	27
図版 12	8号住居完掘状況	27
図版 13	9号住居完掘状況	27
図版 14	出土遺物(1)	28
図版 15	出土遺物(2)	29

表 目 次

第 1 表	ピット計測表	18
第 2 表	出土遺物観察表1	21
第 3 表	出土遺物観察表2	22
第 4 表	出土石器計測表	22

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮脇第2遺跡はもともと駐車場として利用されていたが、土地所有者である更正保護法人みやざき青雲が、駐車場用地を利用して施設を増築する計画が持ち上がり、平成13年9月17日付で「文化財の所在の有無について」の照会が宮崎市教育委員会文化振興課に提出された。

これを受けた文化振興課では、当該地が「浄土江遺跡」「宮脇遺跡」「曾師遺跡」といった周知の遺跡に近接していることから、埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、事前に文化財の有無を確認するための試掘調査が必要であると回答した。

その後平成14年4月25日に試掘調査を行った結果、現地表面から約60cm下で住居址と思われる遺構の一部とそれに伴う遺物が確認されたことから、遺跡の存在を確認した。

その後協議を重ね、工事着手前に記録保存のための発掘調査を行うこととし、平成14年9月2日付けで調査のための委託契約を締結した。現地における調査は平成14年9月17日から11月14日の期間行った。

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

宮脇第2遺跡は大淀川左岸の標高約5mの微高地上に位置する。

遺跡の周辺は宅地化が進んでいるが、周辺の地形は微高地が東・西・北へ広がり、南は1m程度低くなる。そのことから本遺跡は微高地の南端にあたり、南は水田地帯もしくは大淀川の氾濫原であった可能性が高い。周辺には旧石器～縄文時代にかけての遺跡はなく、弥生時代に入ってからこの地域に人が住み始めたようである。

本遺跡の西0.1kmには、昭和52～54年度と平成4年度の4次にわたって調査された浄土江遺跡が所在し、33軒の竪穴住居と数十条の溝状遺構が検出されている。浄土江遺跡の住居址は遺構の切りあい状態や出土状況から3期に分類され、古墳～奈良時代の複合遺跡であることが確認されている。また、約0.2km北東には、平成8年度に調査された宮脇遺跡が所在する。宮脇遺跡からは溝状遺構8条が検出され、そのうちの1条から布痕土器が1点出土している。

東へ約0.5kmのところには、平成8年度に調査された大町遺跡が所在する。大町遺跡からは弥生時代の竪穴住居2軒、掘立柱建物3棟、周溝状遺構、柵列と古墳時代の竪穴住居址61軒、住居の床面から掘り込まれた地下式横穴墓3基、竪穴状遺構6基、土坑、溝状遺構が検出されており、出土遺物等から6世紀後半～7世紀初頭に隆盛した集落である。また、竪穴住居が屋外炉→埋甕炉→埋甕炉+竈→竈のみ、という変遷を遂げたことが指摘され、出土した須恵器から、6世紀末には竈が採用されていたことが明らかになっている。

さらに大町遺跡から北東へ0.7kmのところには平成9・12・14年度にわたって調査された北中遺

跡が所在する。平成9年の調査では竪穴住居1軒、竪穴状造構2基、近世墓3基、土坑2基、溝状造構12条が検出され、古墳時代前中期～近世の複合遺跡であることが確認されている。また1基の竪穴状造構からは大量の鉄滓が出土しており、この地で製鉄にかかる活動がなされていた可能性がうかがわれた。平成12年度の調査では竪穴住居16軒、溝状造構10条、土坑1基、地下式横穴墓10基、ピット数基を検出した。この調査では鉄滓のほかに繩の羽口が出土し、本遺跡で製鉄にかかる活動があったことを裏付ける結果となった。平成14年度の調査では、古墳時代中期～後期、平安時代の竪穴住居18軒、土坑3基、古墳時代、江戸時代の溝状造構11条を確認した。なかでも竪穴住居は、竈や埋甕を付設したものが7軒確認され、過去二回の北中遺跡の調査と併せて古墳時代における集落構成の一端が明らかとなった。

また、日豊本線の線路を挟んで西側、JR宮崎駅から宮崎県庁付近には広島古墳群と呼ばれる古墳群があったことが知られている。この古墳群については大正4(1915)年に谷口章蔵が著した『神都宮崎』に書かれているが、この時点ですでに宅地化が進んで消滅していたため、正確な数や墳丘形態、規模等は不明である。しかし現存する遺物として内行花文鏡や画文帯神獸鏡、杏葉などが宮崎県総合博物館に所蔵されており、出土品からかなり有力な首長層の姿がうかがえる。更に1.1km南西には、弥生時代の遺跡である宮崎小学校遺跡があり、溝状造構から主に弥生時代中期の壺や甕が大量に出土したほか、磨製石斧・環状石斧等の石製品も出土している。ほかにも当遺跡の東側には北中第2遺跡、中原遺跡、今村遺跡、今村前遺跡、下藪遺跡、柿本遺跡といった、弥生時代～古墳時代の散布地が見られる。

また、新別府川を挟んで北には、下田島面群という海進海退による低位の完新世段丘面群が一つ瀬川まで広がり、高位より下田島Ⅰ面～Ⅳ面に区分されている。下田島Ⅰ面にあたる第1砂丘上には弥生時代以降の遺跡が多数存在している。

櫛古墳群は前方後円墳2基、円墳8基が現存している。未指定であるため消滅・改変された古墳も多く、その内容は不明な部分が多い。しかし、櫛1号墳(庵山古墳)は平成6年から宮崎大学教育文化学部により測量調査が進められ、墳長約50mの鐘向型前方後円墳であることが確認された。さらに平成12年度からは同大学により発掘調査が進められ、平成13年度の調査では国内最大級の木棺と思われる埋葬施設が確認されている。また、櫛1号墳から北へ0.6kmには道路改築事業に伴つて調査された江田原第3遺跡がある。この遺跡では直径10～12mの円墳の周溝が確認され、周溝内から出土した遺物より、5世紀後半に比定される消滅古墳の存在が明らかになった。また、宮崎県埋蔵文化財センターが調査した下ノ原第1遺跡では、消滅した古墳3基の一部を確認しており、櫛地区にはかなりの数の古墳が存在していたことがうかがえる。

さらに櫛1号墳北側の櫛中学校敷地は櫛遺跡となっており、日本考古学協会の弥生式土器文化総合研究特別委員会の事業として、昭和31年から3次にわたる調査が行われた。その結果、弥生時代前期の積石墓9基と小児用妻棺が出土している。また約0.4km南には弥生～古墳時代の散布地である櫛小学校遺跡、北西約1kmには弥生時代終末期の祭祀遺跡と考えられている中無田遺跡、その東約0.7kmのところには弥生時代の水田跡である浮ノ城遺跡、さらに東約1kmには、奈良時代の水田跡である櫛北小学校校庭遺跡があり、砂丘上に生活する人々の生産活動の場であったことがうかがえる。

ほかにも壇小学校遺跡の西0.7kmには弥生～古墳時代の散布地である引土遺跡、同じく西0.8kmには庵ノ山遺跡、浮ノ城遺跡の西には浮ノ城第2遺跡、権現山遺跡、立野遺跡が所在する。

さらに北へ目を向けると、平成7年度に調査された弥生～古墳時代の散布地である萩崎第1遺跡が所在する。溝状造構1条と7世紀前葉～中葉に比定される土師器の甕1個体が出土している。また、萩崎第2遺跡の東南東0.8kmには11軒の竪穴住居と3条の溝状造構が検出され、弥生時代中期前半～中世にかけての遺物が出土した猿野遺跡がある。猿野遺跡からは布留式併行期の土器のほか、弥生時代中期前半の土器、古代～中世の土師質土器や瓦器等が出土していることから、長期にわたって生活の場として利用されていたことが分かる。また、猿野遺跡の北約0.6kmのところには弥生時代中期～後期初頭にかかる甕棺墓、壺棺墓等が検出された石神遺跡が所在する。

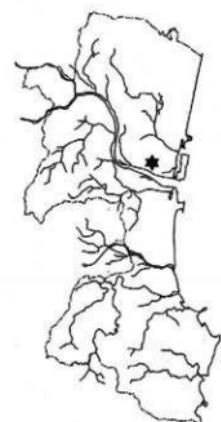
ほかにも弥生～古墳時代の散布地として、萩崎第2遺跡の北0.4kmには萩崎第1遺跡、西へ0.7kmには東大宮遺跡、西南西0.7kmには本村遺跡がある。また、猿野遺跡の南0.6kmには中園遺跡、東0.6kmには前浜遺跡、北東0.8kmには松下遺跡が所在する。

【参考文献】

- 宮崎市教育委員会 1990 『宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅱ』
宮崎市教育委員会 1973 『石神遺跡発掘調査報告書』 宮崎市文化財調査報告書第1集
宮崎市教育委員会 1986 『浮ノ城遺跡』
宮崎市教育委員会 1996 『猿野遺跡・萩崎第2遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第30集
宮崎市教育委員会 1998 『大町遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第33集
宮崎市教育委員会 1999 『北中遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第38集
宮崎市教育委員会 2002 『江田原第3遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第50集
宮崎市教育委員会 2002 『北中遺跡Ⅱ』 宮崎市文化財調査報告書第51集
宮崎市教育委員会 2002 『宮崎小学校遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第53集
宮崎市教育委員会 1981 『淨土江遺跡』 宮崎市文化財調査報告書第6集
宮崎市教育委員会 1993 『淨土江遺跡Ⅱ』 宮崎市文化財調査報告書第25集
宮 崎 県 1989 『宮崎県史』 資料編 考古1
宮 崎 県 1993 『宮崎県史』 資料編 考古2
壇 振 興 会 1990 『壇郷土史』

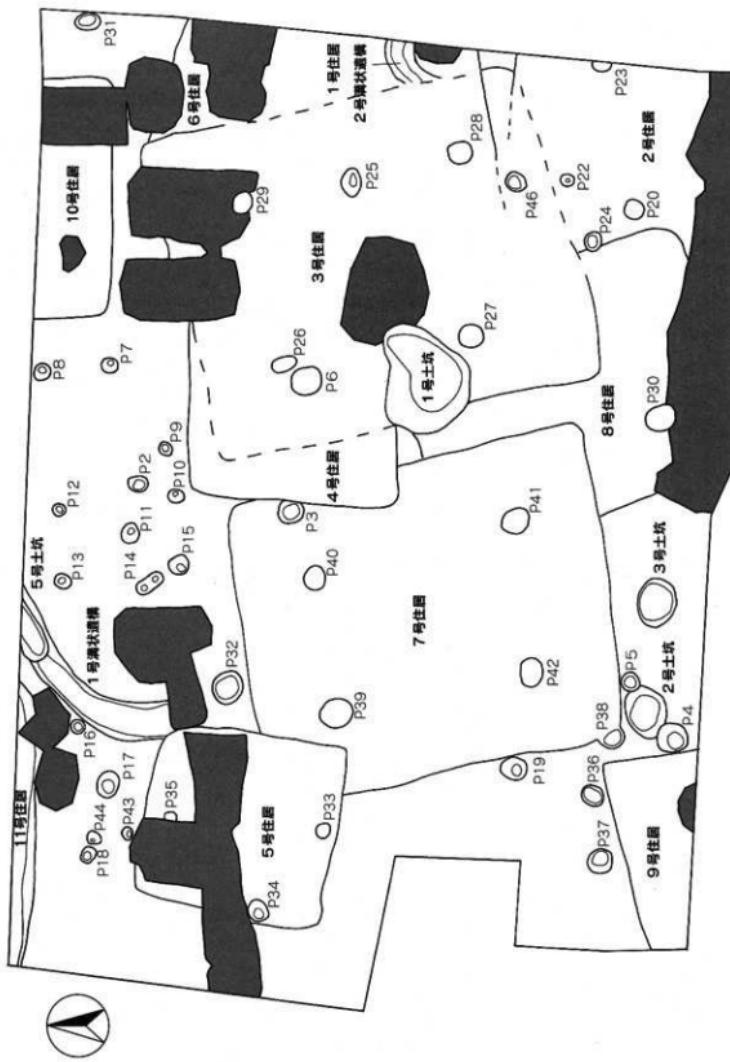


- 1 宮脇第2遺跡 2 净土江遺跡 3 宮崎小学校遺跡 4 広島古墳群
 5 麂ノ山遺跡 6 引土遺跡 7 中無田遺跡 8 権現山遺跡 9 浮ノ城遺跡
 10 立野遺跡 11 船塚古墳 12 大島9号墳 13 本村遺跡 14 東大宮遺跡
 15 萩崎第2遺跡 16 萩崎第1遺跡 17 村角7・8号墳 18 石神遺跡
 19 松下遺跡 20 前浜遺跡 21 袋野遺跡 22 中園遺跡 23 平原第1遺跡
 24 江田原第3遺跡 25 楠北小学校遺跡 26 浮ノ城遺跡 27 江田原第1遺跡
 28 江田原第2遺跡 29 榎遺跡 30 榎1号墳 31 榎3号墳 32 榎古墳(消滅)
 33 榎小学校遺跡 34 北中遺跡 35 北中第2遺跡 36 下飯遺跡 37 今村前遺跡
 38 今村遺跡 39 中原遺跡 40 大町遺跡 41 宮脇遺跡 42 曽爾遺跡



第1図 遺跡の位置とその周辺

第2圖 宮殿第2遺跡全體圖(S=1/80) 0 4 m



第2章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査区は南側2/3程度が駐車場として利用されていたため、平成14年4月の試掘調査の段階では既存建物の裏庭の部分だけの調査となっていた。そのため、南側への遺構の広がりが把握できていなかったため、本調査を開始する前に駐車場部分のアスファルトを撤去し、表土剥ぎも兼ねてアスファルト部分の確認調査を行った。

その結果、調査予定区東端と西端では建物の基礎と思われるコンクリート塊が確認され、後世に搅乱を受けているものと判断し、東側を休憩所、西側を廃土置き場として利用することとした。既存建物部分を含む開発予定面積1105.33m²のうち、調査面積は約170m²である。

狭小な調査区の中でも、施設のごみ穴やコンクリート塊等によって搅乱を受けており、遺構の一部もしくは大半が破壊されているような状況であったが、竪穴住居11軒、土坑4基、溝状遺構2条、ピット45基（竪穴住居址に伴うものも含む）が確認された。

また、当遺跡における基本層序は下記（第3図）の通りである。

I	客 土
II	灰 褐 色 土 直径2~3mmの橙色のスコリア（文明ボラ？）を含む
III	黒 褐 色 土 直径2~3mmの橙色のスコリア（文明ボラ？）を含む
IV	明 黄 褐 色 土 アカホヤ火山灰（遺構検出面）
V	褐 色 砂 質 土 直径3~5mmの白色粒子を密に含む
VI	黄褐色砂質土 鉄分を少量含む。砂粒が細かい
VII	暗褐色砂質土 鉄分を多く含み、直径2~10mmの橙色の砂礫を含む
VIII	青 色 砂 層

第3図 宮脇第2遺跡基本層序柱状図

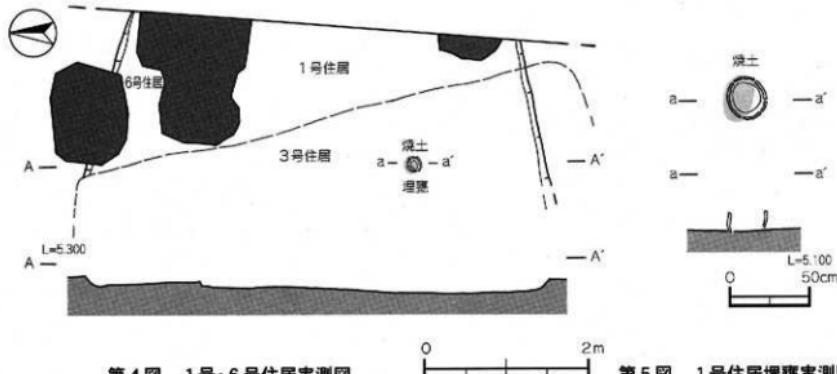
第2節 積穴住居の調査

○1号住居（第4図）

東西長不明×南北4.2m以上の方形を呈し、深さ12cm～20cmを測る。3号・6号住居と2号溝状遺構を切る。遺構の半分以上が調査区外にかかり、擾乱に切られる部分が多いため、住居北壁が不明瞭であり、正確なプラン・サイズは不明である。柱穴は確認できなかった。壁帶溝・竈を持たず、住居のはば中央と思われる部分に埋甕（第5図）を持つ。

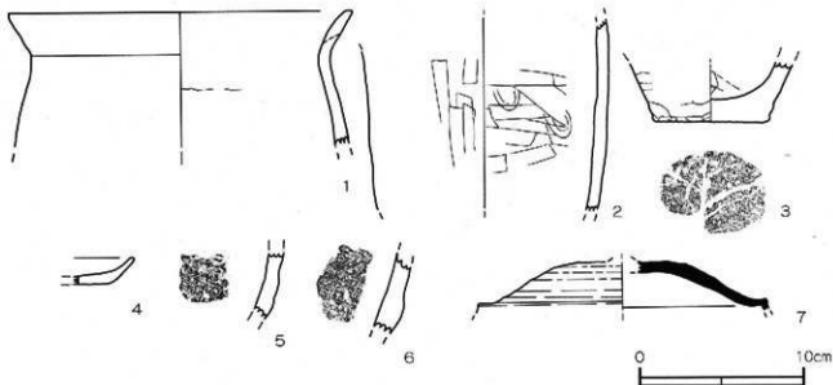
【出土遺物】（第6図）

1・2は甕である。1は口縁部で頸部が緩く外反する。2は埋甕として使用されていたもので、胴部中位のみが残存していた。3は甕の底部で木葉痕が確認できる。4は土師器の壺である。5・6は布痕土器である。7は須恵器の壺蓋である。



第4図 1号・6号住居実測図

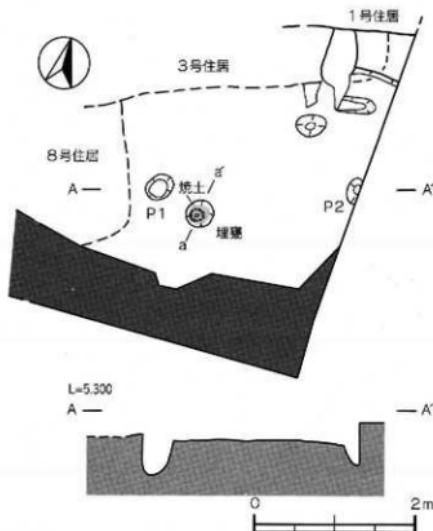
第5図 1号住居埋甕実測図



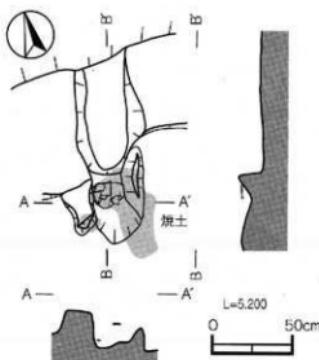
第6図 1号住居出土遺物

○ 2号竪穴住居（第7図）

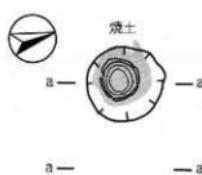
大半を搅乱に切られ、住居同土の切り合いが著しいため、正確なプラン・サイズは不明であるが、確認できた部分で深さ6~12cmを測る。3号・8号住居を切る。柱穴は2基確認され、P1は平面41cm×40cmのほぼ正円形を呈し、深さ41.5cmを測る。P2は半分が調査区外にかかるが、30cm×15cm以上、深さ約23cmを測る。壁帶溝は確認できなかったが、住居北壁に竪（第8図）を付設し、ほぼ中央と思われる部分に埋甕（第9図）を持つ。



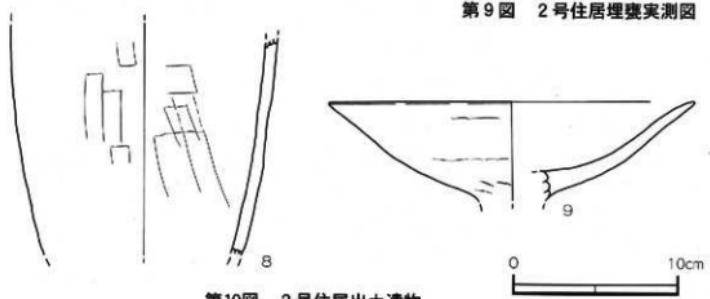
第7図 2号住居実測図



第8図 2号住居竪実測図



第9図 2号住居埋甕実測図



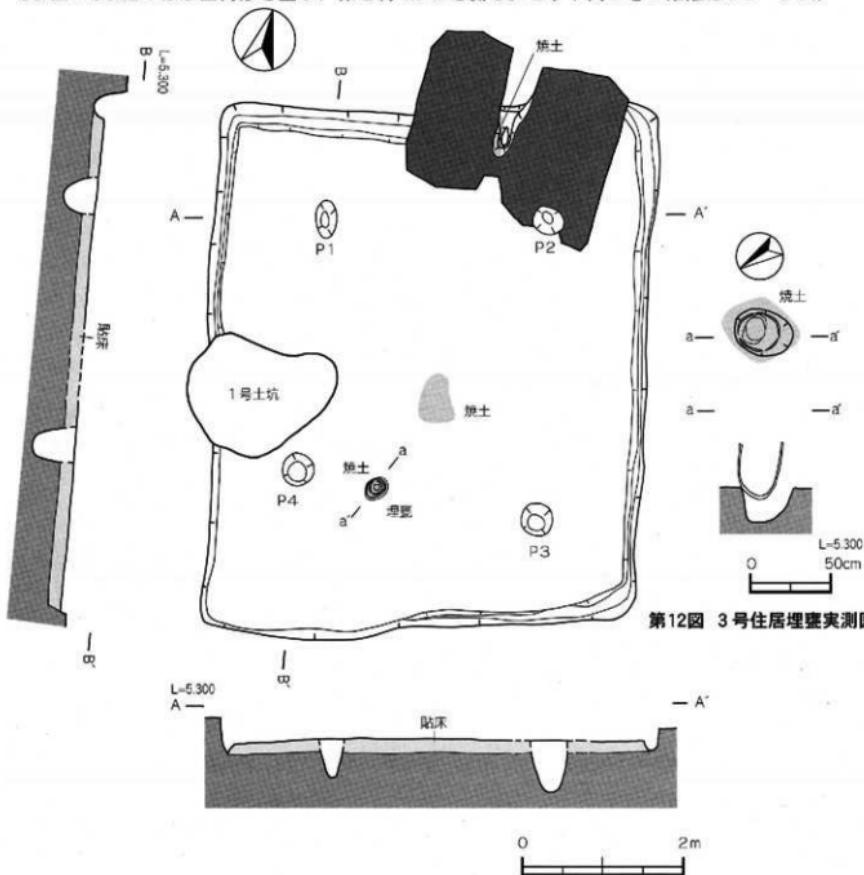
第10図 2号住居出土遺物

【出土遺物】(第10図)

出土した遺物量が少なく、破片が多かったため図示できるものは少ない。8は甕で埋甕として使用されていたもので、胴部中位のみが残存している。9は高坏の坏部で、口縁部が緩やかに開く。

○3号住居(第11図)

東西5.4m×南北6.3mの長方形を呈し、深さは貼床面で10~30cm、貼床下で28~40cmを測る。1号・2号・4号住居と1号土坑に切られ、8号住居を切る。柱穴は貼床を剥がした段階で4基確認された。P1は平面40cm×24cmの楕円形を呈し、深さ約30cm、P2は平面40cm×35cmのほぼ正円形を呈し、深さ約48cm、P3は平面39cm×39cmの正円形を呈し、深さ約57cm、P4は39cm×38cmのほぼ正円形を呈し、深さ約36cmを測る。ピット間の心々距離はP1-P2が

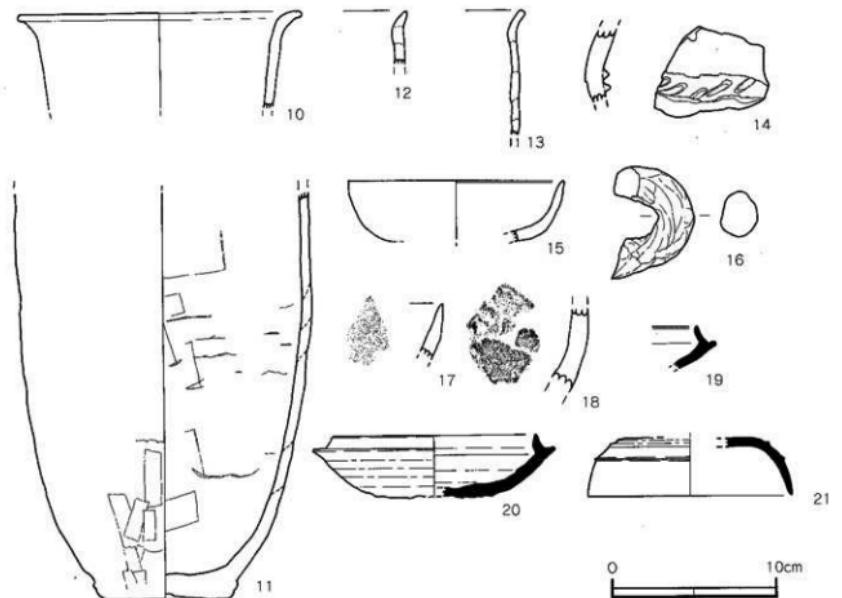


第11図 3号住居実測図

2.8m、P2-P3が3.8m、P3-P4が3.0m、P4-P1が3.2mを測る。壁帶溝を持ち、幅2~10cm、貼床面からの深さ4~25cmを測る。住居北壁に竈を付設するが、攪乱によって切られしており、粘土塊と焼土の一部がわずかに残存しているにすぎない。住居中央よりやや南西寄りで埋甕（第12図）を持つ。また、住居中央部分で焼土が確認された。

【出土遺物】（第13図）

10~13は甕である。11は埋甕として利用されていたもので、口縁部を欠く。12・13はほぼ直立する甕の口縁部である。14は壺の頸部付近で刻目直帯を持つ。16は甕の把手である。17・18は布痕土器である。19~21は須恵器で19・20は坏身、21は坏蓋である。



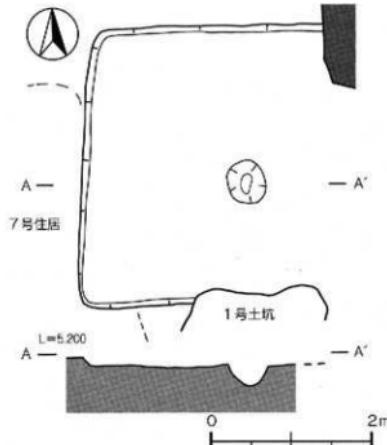
第13図 3号住居出土遺物

○4号住居（第14図）

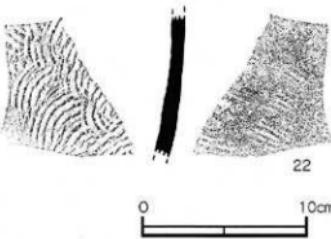
東西長不明×南北3.5mの方形を呈し、深さ10~18cmを測る。3号・7号住居を切り、1号土坑に切られる。東壁が確認できなかつたため、正確なサイズ・プランは不明である。住居のほぼ中央で住居に伴うと思われる土坑状の掘り込みが確認された。平面形52cm×46cmの楕円形を呈し、深さ33.2cmを測る。地床炉の可能性もある。柱穴・壁帶溝・竈・埋甕はいずれも確認されなかつた。

【出土遺物】（第15図）

出土遺物が少なく、碎片の状態のものが多かつたため、図示できるものはほとんどなかつた。22は須恵器甕の破片である。



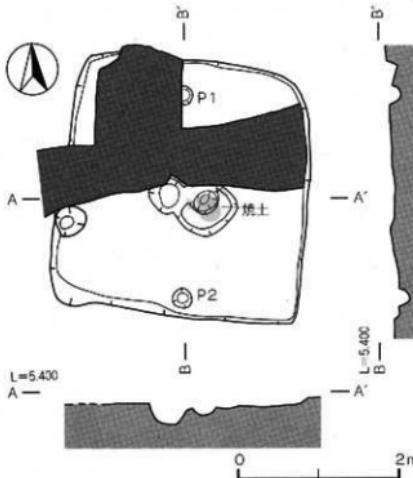
第14図 4号住居実測図



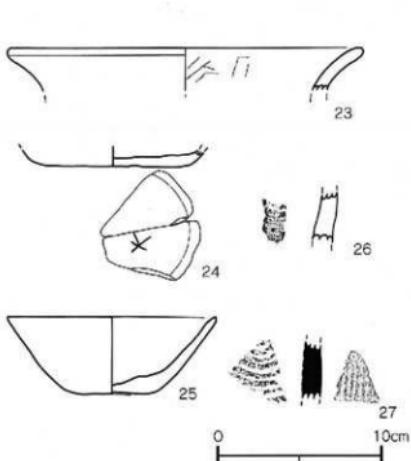
第15図 4号住居出土遺物

○5号住居 (第16図)

東西3.0 m × 南北3.2 mの長方形を呈し、深さ4~6 cmを測る。プランの半分近くを搅乱によって切られる。7号住居を切る。柱穴と思われるものが2基確認され、P1は半分近くを搅乱に切られるが、平面18 cm × 12 cm以上、深さ約10 cmを測り、P2は平面26 cm × 24 cmのほぼ正円形を呈し、深さ約24 cmを測る。ピット間の心々距離は2.5 mを測る。壁帶溝・竈とともに確認されなかったが、住居のほぼ中央で焼土と地床炉と思われる掘り込みを検出した。掘り込みは平面100 cm × 67 cmの椭円形を呈し、深さは最も深い部分で約24 cmを測る。



第16図 5号住居実測図



第17図 5号住居出土遺物

【出土遺物】(第17図)

23は甕で、口縁部は屈曲せず緩やかに開く。24・25は壺である。24は底部に「大」の刻字を持つ。26は布痕土器である。27は須恵器甕の胴部の一部である。

○6号住居(第4図)

北・東を擾乱に、南を1号竪穴住居に、西を3号竪穴住居に切られるため、正確なサイズ・プランともに不明であるが、確認できた部分で深さ12~14cmを測る。柱穴・壁帶溝・竈・埋甕は確認できなかった。

【出土遺物】

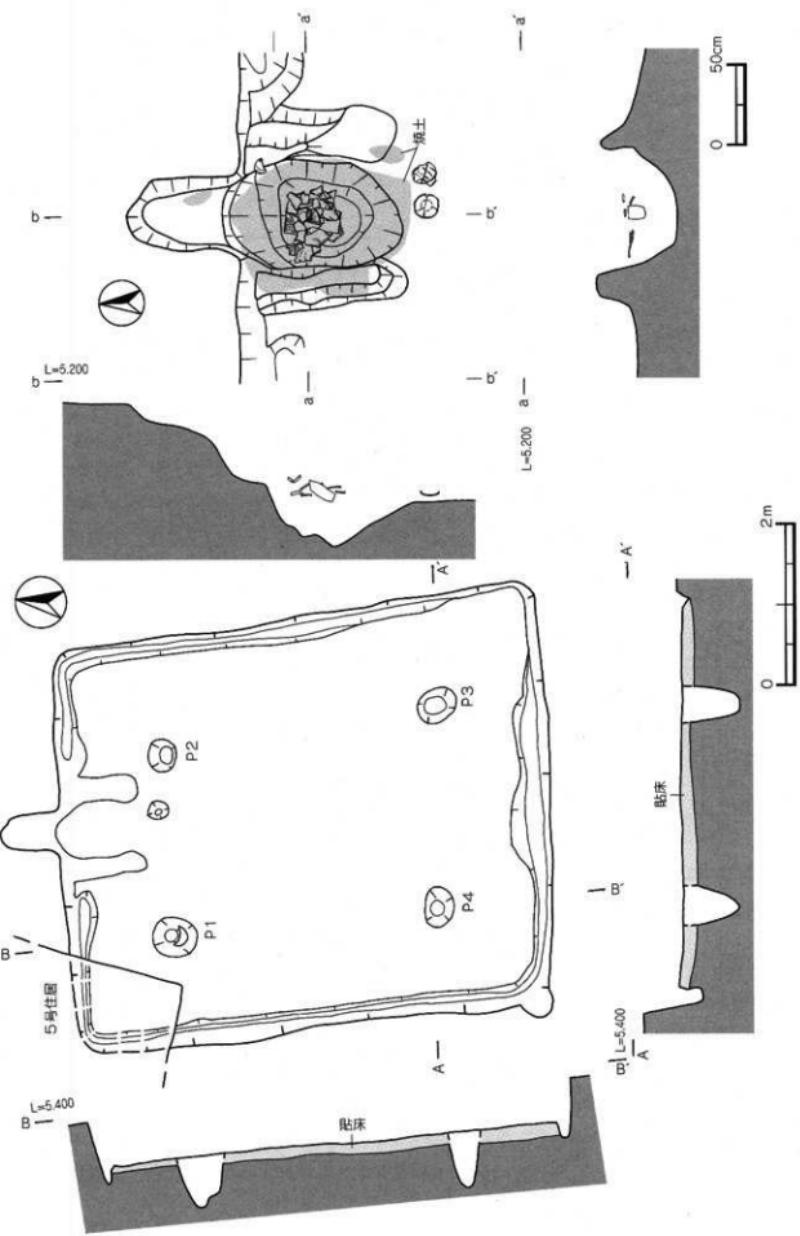
遺物のほとんどが破片の状態で、遺構の時期を特定できるような遺物は出土しなかった。また接合も困難であったため、図示できるようなものはなかった。

○7号住居(第18図)

東西5.0m×南北6.1mの長方形を呈し、深さは貼床面で50~56cm、貼床下で64~72cmを測る。4号・5号住居に切られる。柱穴は4基確認され、P1は平面54cm×50cmの楕円形を呈し、南側にテラスをもち、深さ約55cm、P2は平面41cm×33cmの楕円形を呈し、深さ約66cm、P3は48×41cmの楕円形を呈し、深さ約58cm、P4は平面50cm×36cmの楕円形を呈し、深さ約50cmを測る。ピット間の心々距離はP1-P2が2.2m、P2-P3が3.3m、P3-P4が2.5m、P4-P1が3.3mである。壁帶溝を持ち、幅3~18cm、貼床面からの深さ3~29cmを測る。住居北壁に竈(第19図)を付設する。埋甕は確認できなかった。

【出土遺物】(第20図)

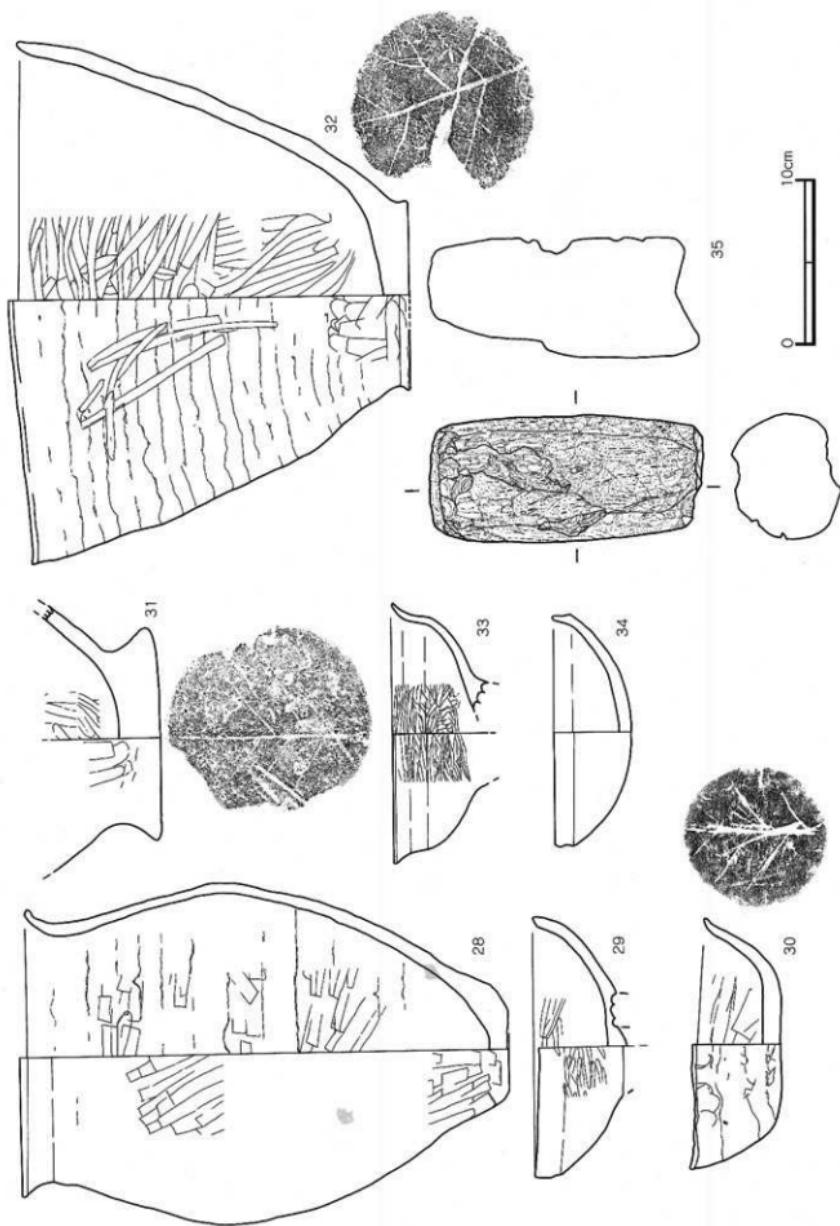
28は甕である。口縁部は緩やかに外反する。29は高壺の壺部である。30は壺で底部に木葉痕が確認できる。31~35は竈から出土した遺物である。31は甕の底部で、木葉痕が確認できる。32はほぼ完形の甕で、底部に木葉痕が確認できる。33は高壺の壺部で口縁部が緩く外に開く。34は土師器の壺である。35は軽石製の支脚である。



第18図 5号住居実測図

第19図 7号住居実測図

第20図 7号住居出土遺物



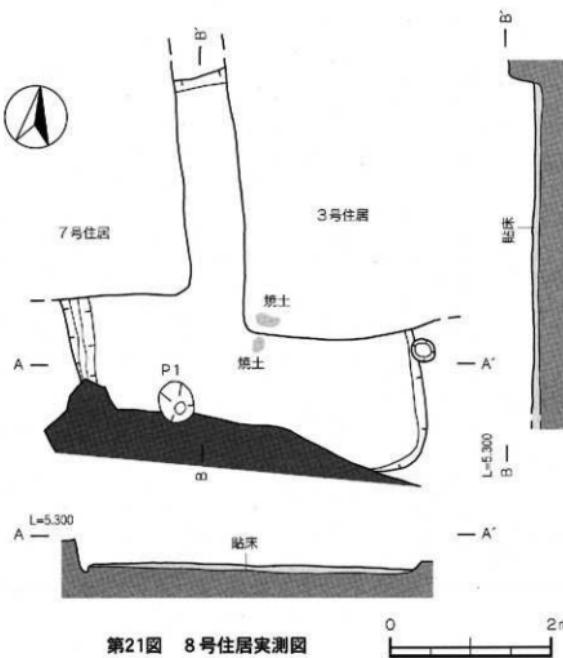
○ 8号住居（第21図）

東西5.0m×南北4.3m

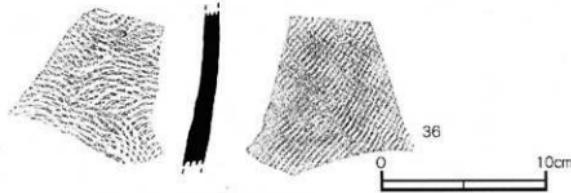
以上の方形を呈し、深さは貼床上で15~32cm、貼床下で28~40cmを測る。3号・7号竪穴住居と搅乱に切られる。住居南西隅で柱穴と思われるピットが確認されている。平面形51cm×42cmの楕円形を呈し、深さ71.5cmを測る。壁帶溝を持ち、幅18~34cm、貼床からの深さ2~10cmを測る。竪・埋甕とともに確認されなかつたが、住居のほぼ中央と思われる部分で焼土が確認されている。

【出土遺物】（第22図）

遺物の量が少なくほとんどが破片の状態であったため、遺構の時期が特定できるような遺物はなく、図示できるものも少なかつた。36は須恵器甕の破片である。



第21図 8号住居実測図



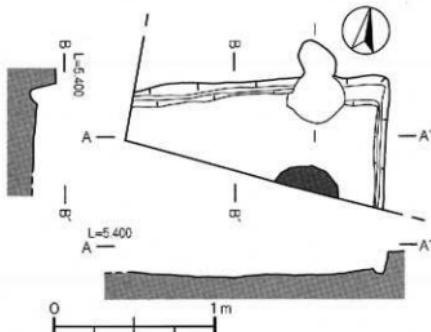
第22図 8号住居出土遺物

○ 9号住居（第23図）

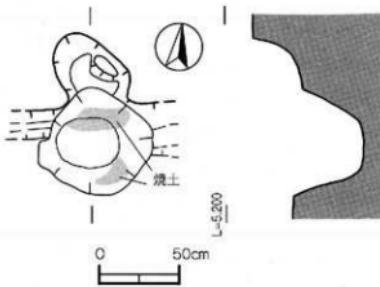
遺構の大半が調査区外にかかり、住居の北東隅を確認できただけにすぎないため、正確なプランやサイズは不明である。確認できた部分で深さ20~25cmを測る。柱穴は確認されなかつた。壁帶溝を持ち、幅15~25cm、深さ22~32cmを測る。住居の北壁の中央よりやや東に竪（第24図）を付設するようであるが、掘り込みが確認できたのみであった。

【出土遺物】

遺物のほとんどが破片の状態で、遺構の時期を特定できるようなものは出土しなかつた。また、接合も困難であったため、図示できるような遺物はなかつた。



第23図 9号住居実測図



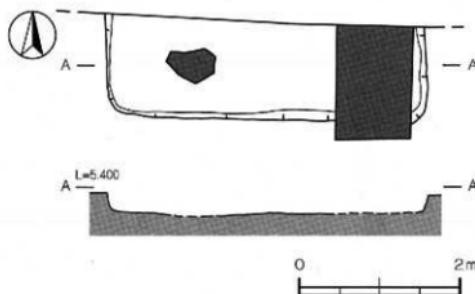
第24図 9号住居竪実測図

○ 10号住居 (第 25 図)

東西 4.0 m × 南北 1.2 m 以上を測る。遺構の大半が調査区外にかかり、南側 1/4 程度を確認できたに過ぎない。検出できた部分も半分近くを搅乱に切られる。確認された部分で深さ 20 ~ 26 cm を測る。柱穴・壁帶溝・竪・埋甕とともに確認できなかった。

【出土遺物】(第 26 図)

37 は高壙の脚部である。緩やかにハの字に開く。



第25図 10号住居実測図

第26図 10号住居出土遺物

○ 11号竪穴住居 (第 2 図)

遺構の大半が調査区外にかかり、正確なプラン・サイズは不明であるが、確認できた部分での深さは 35 ~ 60 cm である。柱穴・壁帶溝・竪・埋甕はいずれも確認できなかった。

【出土遺物】

遺構の大半が調査区外にかかるため、この遺構に伴うものと思われる遺物は出土していない。

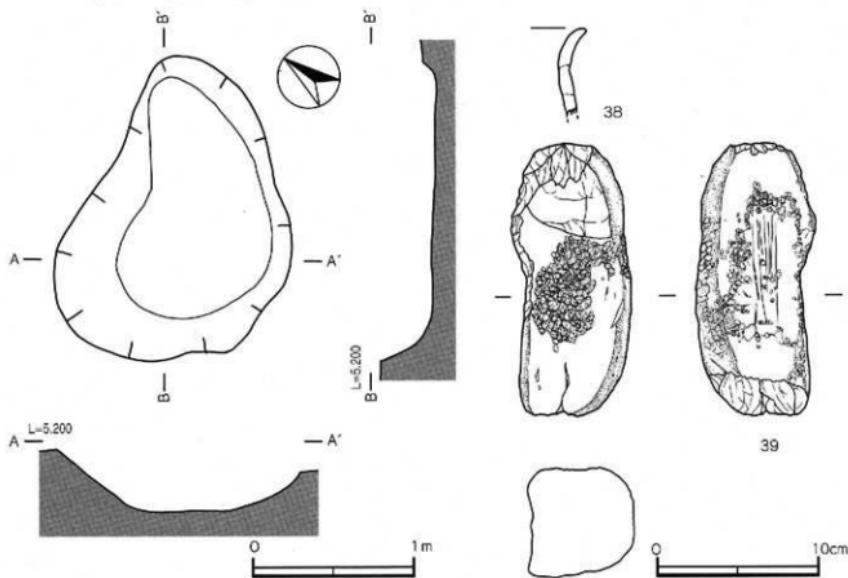
第3節 土坑の調査

○ 1号土坑（第27図）

1.8 m × 1.3 m の不定梢円形を呈し、深さ 54 cm を測る。3号竪穴住居を切る。

【出土遺物】（第28図）

38は緩やかに外反する壺の口縁部である。39は凹石である。



第27図 1号土坑実測図(S=1/30)

○ 2号土坑

88 cm × 66 cm の梢円形を呈し、深さ 77 cm を測る。出土遺物は碎片がほとんどで、遺構の時期を特定できるようなものは出土しなかった。また、接合が困難であったため、図示できるようなものはなかった。

○ 3号土坑

78 cm × 67 cm の梢円形を呈し、深さ 86 cm を測る。遺物は出土しなかった。

○ 4号土坑

70 cm 以上 × 55 cm の梢円形を呈し、深さ 18 ~ 20 cm を測る。1号溝状造構を切る。遺構の半分近くが調査区外にかかるため、正確なプラン・深さは不明である。遺物は出土しなかった。

第4節 溝状遺構の調査

○1号溝状遺構（第2図）

調査区北壁から南にのびる溝で、幅40～65cm、深さ15～21cmを測る。途中で搅乱に切られる。遺物は出土しなかった。

○2号溝状遺構（第2図）

調査区東壁から南に向けて蛇行する溝で、幅40～50cm、深さ15～34cmを測る。3号住居と2号住居竈煙道に切られる。遺物は出土しなかった。

第5節 ピットの調査（第2図）

ピットは調査区から45基検出された（第2図）。うち、竪穴住居に伴うものは11基である。2号・6号・19号・38号・43号・44号ピットから遺物が出土しているが、いずれも住居跡に伴うものではなく、遺物も碎片で図示できるようなものはなかった。大半が流れ込みだと考えられる。各ピットのサイズは下記（第1表）の表の通りである。

第1表 ピット計測表（単位はすべてcm）

No.	長径	短径	深さ	備考
1	—	—	—	搅乱
2	32.5	26.9	38.5	
3	43.0	40.5	40.2	
4	50.3	48.6	36.6	
5	34.1	31.7	29.6	
6	52.6	46.1	33.2	4号住居柱穴
7	27.8	27.0	44.6	
8	26.1	25.6	14.9	
9	25.7	21.7	14.4	
10	26.2	23.2	25.0	
11	32.4	32.0	44.7	
12	21.0	20.3	49.6	
13	28.2	25.1	51.4	
14	50.1	26.2	34.5	
15	34.8	33.6	42.7	
16	21.4	21.3	26.8	
17	43.2	39.4	17.8	
18	29.0	22.6	27.3	
19	41.4	40.8	40.0	
20	35.1	31.7	41.5	2号住居柱穴
21	—	—	—	搅乱
22	23.2	19.4	23.4	2号住居柱穴
23	30.0	15以上	23.4	調査区外にかかる

No.	長径	短径	深さ	備考
24	30.2	26.0	16.5	
25	47.9	34.3	14.4	
26	40.1	23.6	29.5	3号住居柱穴
27	39.2	38.2	36.0	"
28	39.3	39.0	56.8	"
29	40.4	34.5	47.2	"
30	51.5	42.0	71.5	8号住居柱穴
31	42.2	31.8	13.8	
32	52.3	51.6	35.8	
33	26.2	24.1	24.4	5号住居柱穴
34	38.0	34.2	26.2	
35	?	?	10.1	5号住居柱穴
36	35.3	33.8	26.3	
37	42.0	36.3	42.4	
38	?	?	37.3	
39	54.2	49.4	55.4	7号住居柱穴
40	40.7	33.0	63.3	
41	47.9	41.1	58.3	
42	49.2	36.4	50.2	
43	24.4	16.4	29.7	
44	24.1	21.6	25.4	
45	35.4	29.2	28.1	
46	35.5	29.3	28.1	

第3章 まとめ

今回の調査では調査区の至るところを攪乱によって破壊されながらも、竪穴住居11軒、土坑4基、溝状造構2条が検出された。住居址を中心に今回の調査と周辺遺跡の調査成果を踏まえて、本書のまとめとしたい。

当遺跡の住居址を出土遺物と造構の切り合い関係から古い順に並べて（但し6号・11号住居は出土遺物がなく、時期不明である）みると、

8号住居 … 焼土のみが確認されている

↓

3号住居 } … TK43～209段階で、住居北壁に竈を付設する。7号住居は煙道付竈と埋甕の両方を
7号住居 } 併用する。9号住居も同時期か。

↓

(1号土坑 … TK217段階か?)

↓

1号住居 } … TK46～48段階で埋甕を持つ。2号住居は煙道付竈と埋甕の両方を併用する。
2号住居 }

↓

5号住居 … 刻書土器（「大」）やその他の遺物から8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。
地床炉を有する。

また出土遺物がなく、時期不明な6号住居・11号住居を除き、10号住居は住居の規模や主軸の方位から5号住居とはほぼ同時期だと考えられる。竈は大半が焚口を南に向けており、付設する位置は住居北壁中央がほとんどである。唯一9号住居だけが北東隅に付設しているが、竈の位置による時期差等は確認できなかった。

当遺跡の東0.5kmの大町遺跡（註1）も、当遺跡と時期が重複するものがある。大町遺跡の調査成果では、住居内の施設の変化から「竈・埋甕を両方とも持たないもの」→「埋甕を有するもの」→「埋甕と竈の両方を有するもの」→「竈のみを有するもの」の順で新しくなるという報告がなされている。

しかし当遺跡においては、煙道付竈を有する住居（2号・3号・7号・9号住居）の後に竈を持たない住居（5号住居）が出現する。また、今回の調査では埋甕をもつ1号住居から竈は確認されず、竈のみを有する住居（7号住居）に後出する。

さらに北中遺跡Ⅲ（註2）では、8～9世紀の住居で埋甕が確認されていることや竈を持つ住居の後に地床炉を持つ住居が出てくることから、大町遺跡での報告を再検討する必要があるであろう。

また、住居方位から検討すべく、各住居の方位を下表に示す。

	住居方位
1号住居	N-12° -W
2号住居	N-5° -E
3号住居	N-15° -W
4号住居	N-5° -E
5号住居	N-10° -E
6号住居	N-20° -E?

	住居方位
7号住居	N-10° -W
8号住居	N-18° -W
9号住居	N-10° -W
10号住居	N
11号住居	不明

宮脇第2遺跡の住居は4つの時期に分けられることは先述した通りだが、当遺跡でもっとも古い8号住居と3号・7号・9号住居の主軸の方位がほとんど同じである。それ以外の時期では住居の主軸方位が少しずつ異なるため、8号住居と3号住居のグループの時期は極端に異なるものではないと考えられる。しかし、8号住居からの遺物が極端に少ないため、竈も埋甕も持たない8号住居から竈と埋甕を持つ3号住居のグループに、どのように移行したのか、明確な時期差が出せなかつたのは残念である。

また、住居全体の方位を見ると、時期の古いものは主軸が磁北よりも西に振るが、新しくなるとほぼ北か、もしくは東に振る傾向が見られる。このことは、当時の自然環境の変化によるところが大きいのかも知れない。

また、大町遺跡では竈の採用を画期に住居が小型化するという報告がなされているが、竈を持つ3号住居のグループはサイズが非常に大きく、先行する8号住居よりもはるかに大きい。また、1号・2号住居が攪乱により正確なサイズが把握できていないが、4号・5号住居は極端なほどに小型化している。住居方位をほとんど同じくする10号住居も、東西長が小さく、3号住居のような大型の住居とは考えづらい。時期差と住居サイズの変遷等も今後の調査の増加により明らかになると思われる。

今回の調査結果により、従来の調査結果を再検討する必要が出てきた。今後の周辺地域での調査の増加を待って、当遺跡の意義を再検討する必要があると思われる。

最後になりましたが、調査にご協力頂いた更生保護法人みやざき青雲の職員の皆様をはじめ、周辺の皆様や関係機関の方々、残暑厳しい時期から肌寒い秋までの間、懸命に作業に従事して下さった作業員の皆様、本書の作成にあたりご指導・ご助言下さった方々へ、心より感謝申し上げます。

(註1) 宮崎市教育委員会 1998 『大町遺跡』

(註2) 報告書は平成14年度刊行予定

【参考文献】

- 宮崎市教育委員会 1981 『浄土江遺跡』
宮崎市教育委員会 1993 『浄土江遺跡Ⅱ』
九州前方後円墳研究会 2002 『古墳時代中・後期の土師器』

第2表 出土遺物観察表1

()内は推定値

遺物番号	出土遺構	種類 器種	法量(cm)		調整		色調		胎土	備考
			口径	高径	外面	内面	外面	内面		
1	1号住居	土師器 甕	21.7		ナデ	ナデ	橙 褐灰	橙 褐灰	透明・褐色の砂礫・砂粒を多く含む	
2	1号住居	土師器 甕			ケズリ	ケズリ後 ナデ	灰褐 褐灰	にぶい橙 褐灰	白・褐・黒の砂粒を多く含む	
3	1号住居	土師器 甕		(6.6)	ナデ	ケズリ	にぶい褐 浅黄橙	橙	褐色の砂粒を多く含み、透明や黒の光る 細砂粒を含む	木葉痕
4	1号住居	土師器 甕			調整不明	調整不明	橙	橙	橙色の微細粒を含む	風化著しい
5	1号住居	土師器 鉢			ナデ		橙	にぶい橙	1mm程の黒や褐・褐色の砂礫を多く含む	布痕
6	1号住居	土師器 鉢			ナデ		橙	橙	褐色や黒の縞を多く含む	布痕
7	1号住居	須恵器 壺蓋			ケズリ ナデ	ナデ	灰	灰黃鉄	1mm以下の白い微細粒をわずかに含む	
8	2号住居	土師器 甕			粗いケズリ	ケズリ	橙	にぶい黄鉄 褐灰	5mmの黒い砂礫を少量、黒・褐色の砂粒 を多く含む	スス付着
9	2号住居	土師器 壺	(22.3)		調整不明	ミガキ?	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の褐色・乳白色の微細粒を含む	
10	3号住居	土師器 甕	(16.7)		ケズリ後 ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄鉄	にぶい灰褐色・にぶい褐色の砂粒・細砂粒 を多量に含む	
11	3号住居	土師器 甕		(7.4)	ケズリ後 ナデ	ケズリ後 ナデ	橙 褐	にぶい黄鉄 灰黃鉄	褐色・灰色の砂粒や微細粒を多く含む	スス付着
12	3号住居	土師器 甕			ナデ	ナデ	にぶい黄鉄	にぶい黄鉄	2mm以下の黒色及び透明の細砂粒を微量 含む	スス付着
13	3号住居	土師器 甕			ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	褐色の細砂粒を含み、黒褐色の砂礫を 少量含む	輪積痕 スス付着
14	3号住居	土師器 甕			ナデ	ナデ	橙	浅黄鉄	灰褐・褐鉄の砂礫・砂粒を多く含む	刻目突帯
15	3号住居	土師器 壺身	(13.2)		ナデ	ナデ	浅黄鉄	浅黄鉄	2mmの褐色の砂粒を少量と、黒の細砂粒 を含む	
16	3号住居	土師器 甕			ユビオサエ		浅黄鉄	浅黄鉄	褐色の砂粒を少量含む	把手のみ
17	3号住居	土師器 鉢			ナデ		橙	橙	黒・褐色の砂粒を少し含む	布痕
18	3号住居	土師器 鉢			調整不明		にぶい橙	橙	灰・褐色の砂粒・細砂粒を少し含む	布痕
19	3号住居	須恵器 壺身			ナデ	ナデ	灰白	灰白	黒・白の細砂粒・微細粒を含む	自然釉
20	3号住居	須恵器 壺身	(12.4)(3.8)(5.4)		ケズリ	ナデ	灰	にぶい黄	黒の砂粒と細砂粒を含む	自然釉
21	3号住居	須恵器 壺身	(12.9)		ケズリ後 ナデ	ナデ	黒	灰	白の細砂粒を含む	
22	4号住居	須恵器 甕			タタキ	同心円文 前オーリーブ灰	灰 前オーリーブ灰	灰	白の砂粒を少量と、黒の細砂粒を含む	
23	5号住居	土師器 甕			ナデ	ナデ	浅黄鉄	にぶい黄鉄	褐色の細砂粒を多量に含む	
24	5号住居	土師器 甕		(7.7)	調整不明	調整不明	浅黄鉄	浅黄鉄	褐色・白色の微細粒を含む	刻書「人」
25	5号住居	土師器 甕	(12.6)	4.8	(4.0)	調整不明	調整不明	にぶい橙 黄鉄	透明で光る微細粒を含む	

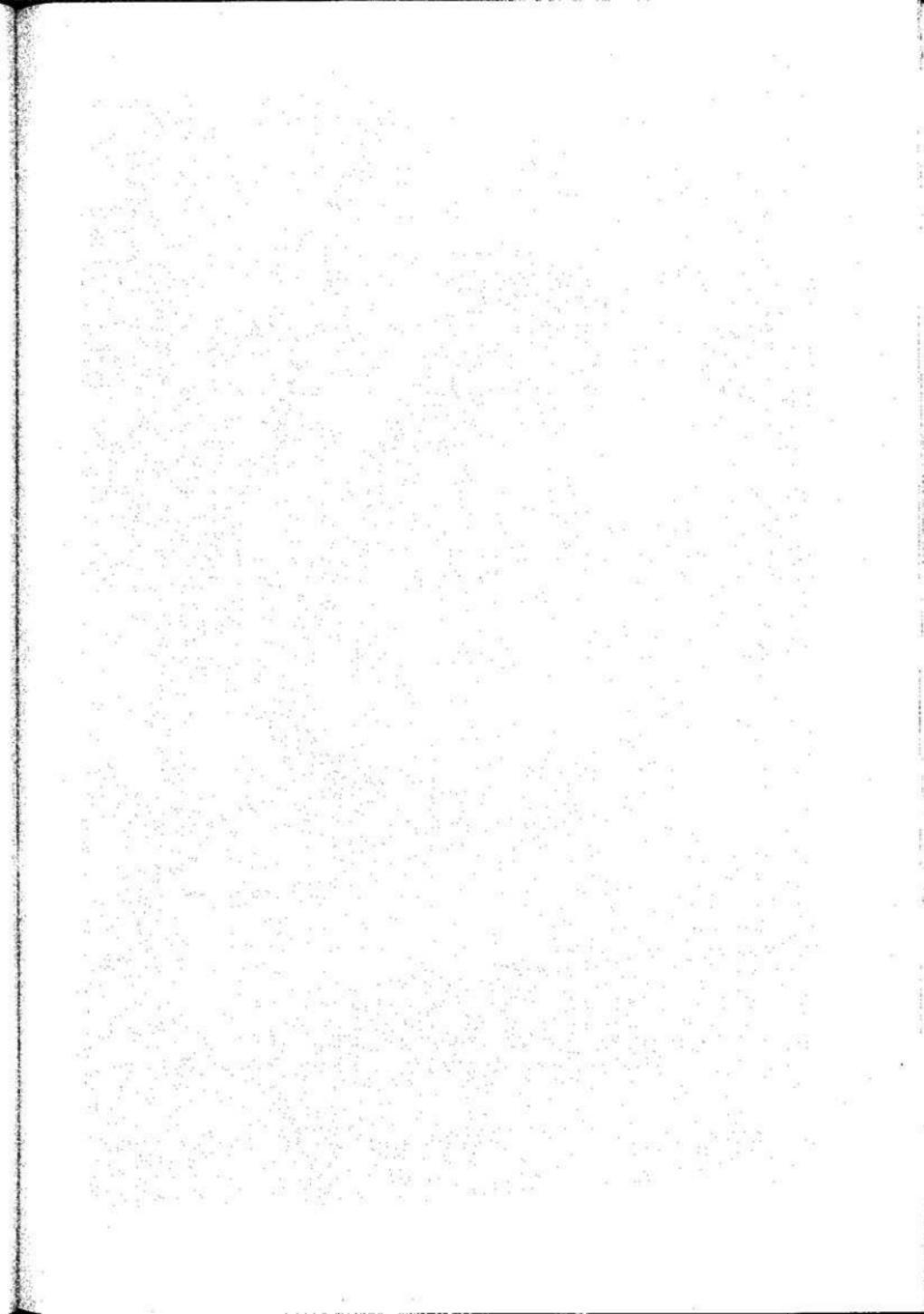
第3表 出土遺物観察表2

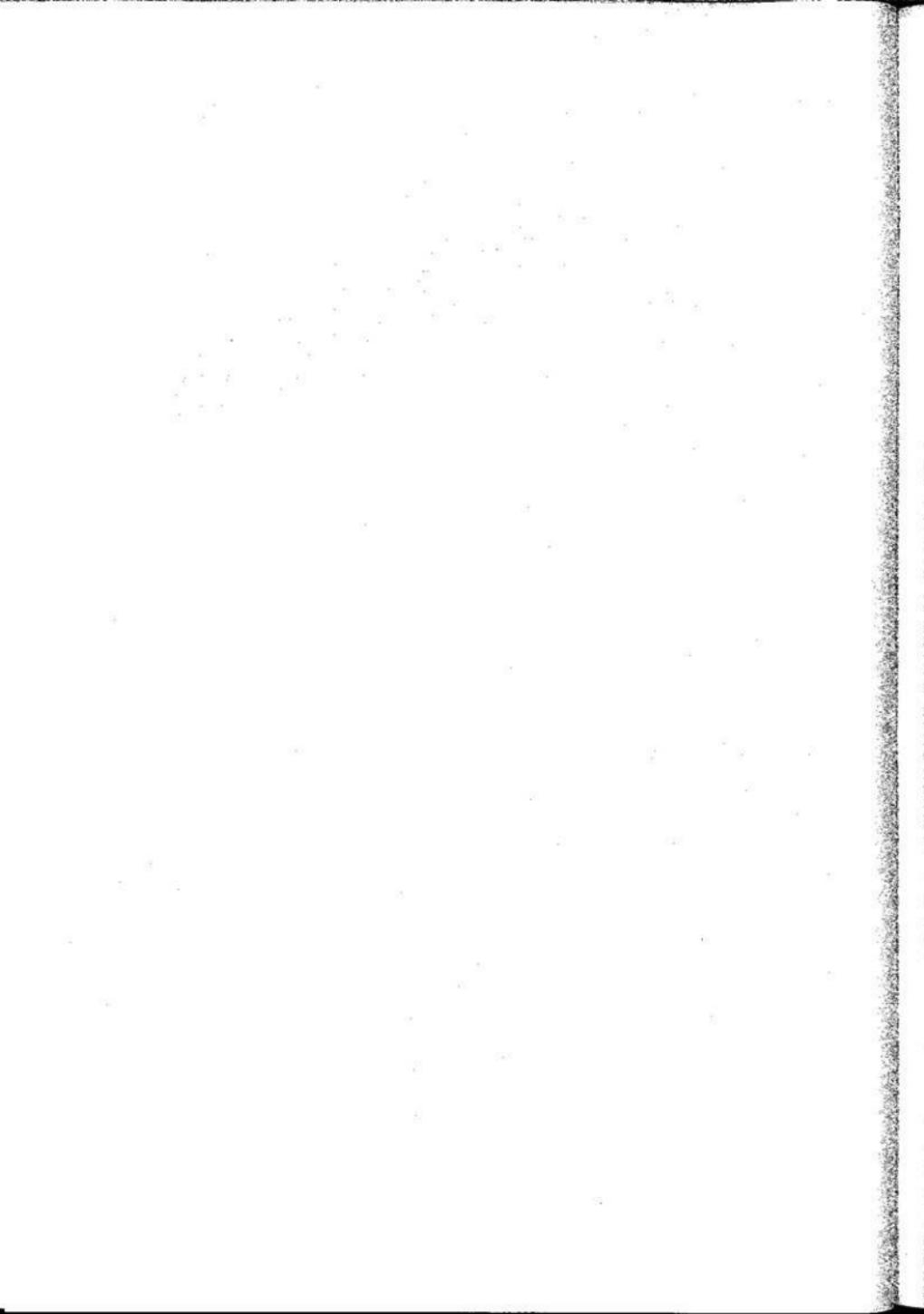
()内は推定値

遺物番号	出土遺構	種類 器種	法量(cm)			調 整		色 調		胎 土	備 考
			口径	高さ	底径	外 面	内 面	外 面	内 面		
26	5号住居	土師器鉢				ナデ		明赤褐	明赤褐	褐色・白色の微細粒を含む	布痕
27	5号住居	須恵器甕				タタキ	同心円文	灰	灰	2mmの白の砂粒を少量含む	
28	7号住居	土師器甕	17.3	30.0	4.8	ケズリ後 ナデ	ケズリ後 ナデ	橙 黒褐	黄橙 黒	褐色の繊・砂穢を多く含む	
29	7号住居	土師器高环	15.9			ミガキ	ミガキ	橙 にぶい橙	橙	2~3mmの褐・褐灰の砂粒を多く含む	
30	7号住居	土師器环	15.2	5.4	6.3	ナデ	ナデ	橙	橙	4mm以下の褐色・乳白色の砂穢を多く含む	木葉底
31	7号住居	土師器甕			8.8	ケズリ後 ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙 黒	褐色の砂粒を含み、白の砂粒・細砂粒を微量含む	木葉底
32	7号住居	土師器甕	31.8	24.6	11.3	ナデ	ケズリ後 ナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい橙 灰褐	褐色の砂穢を多く含む	木葉底
33	7号住居	土師器高环	(15.8)			ミガキ	ミガキ	明赤褐	明赤褐	褐色の微細粒や細砂粒を含む	
34	7号住居	土師器身环	13.8	4.8		調整不明	調整不明	橙 黄橙	橙 黄橙	灰色・乳白色の繊・砂穢を多く含む	風化著しい
35	7号住居	支脚									石器計測表参照
36	8号住居	須恵器甕				格子文	同心円文	灰	灰 灰白	白・黒の砂粒を含む	
37	10号住居	土師器高环		(10.4)	不明	不明	不明	橙	にぶい黄橙	褐色の微細粒を含む	風化著しい
38	1号住居	土師器甕				ナデ	ナデ	にぶい橙 淡赤橙	灰黄褐	褐色の微細粒・砂穢を含み、無色透明で光る微細粒を微量含む	
39	1号住居	円石									石器計測表参照

第4表 出土石器計測表

番号	出土遺構	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
35	7号住居	支脚	16.70	7.70	7.30	260.0	軽石	
39	1号土坑	凹石	16.60	6.90	6.70	1,215.0	砂岩	





圖版 1 宮脇第2造跡全景

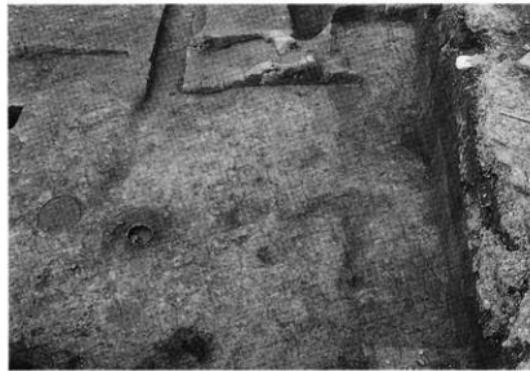




圖版2
1号住居埋甕検出状況



圖版3
1号・6号住居完掘状况



圖版4
2号住居埋甕検出状況



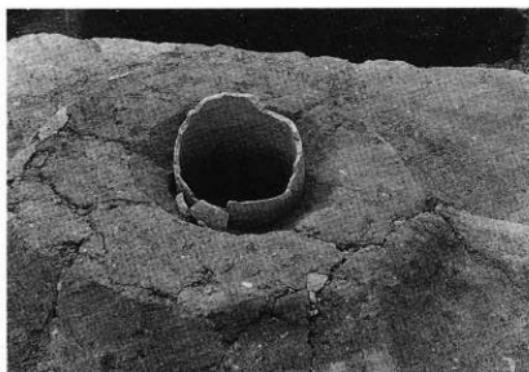
圖版 5
2号住居埋甕検出状況



圖版 6
2号住居完掘状况



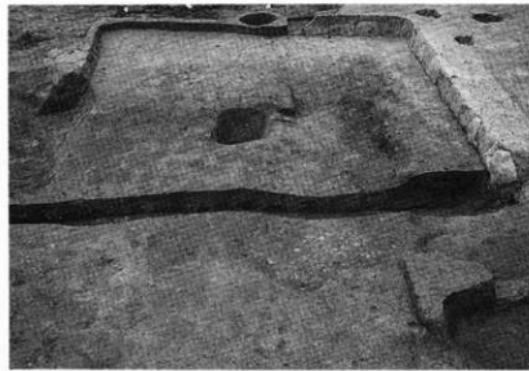
圖版 7
3号・7号住居完掘状况



圖版 8
3 号住居埋甕検出状況



圖版 9
7 号住居甕検出状況



圖版 10
4 号住居完掘状況



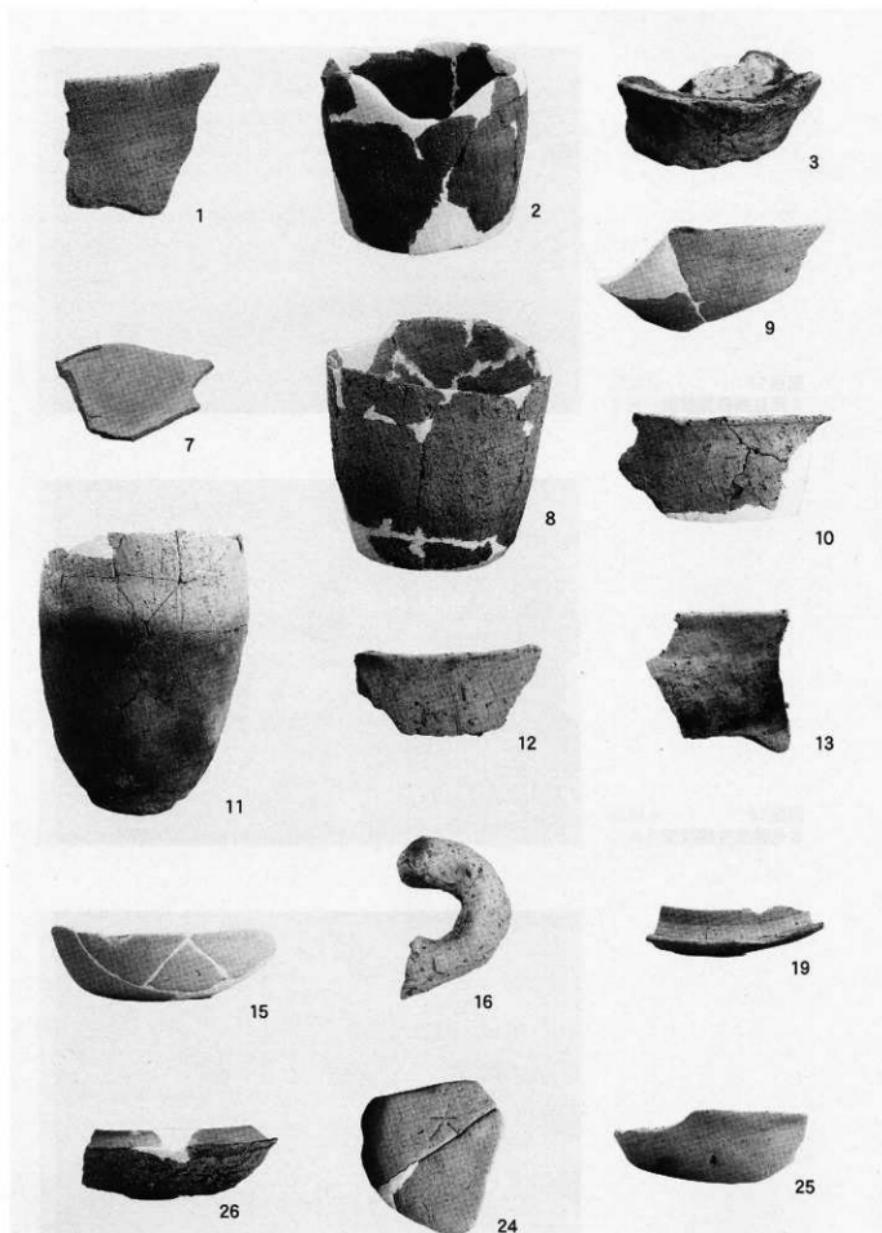
图版11
5号住居完掘状况



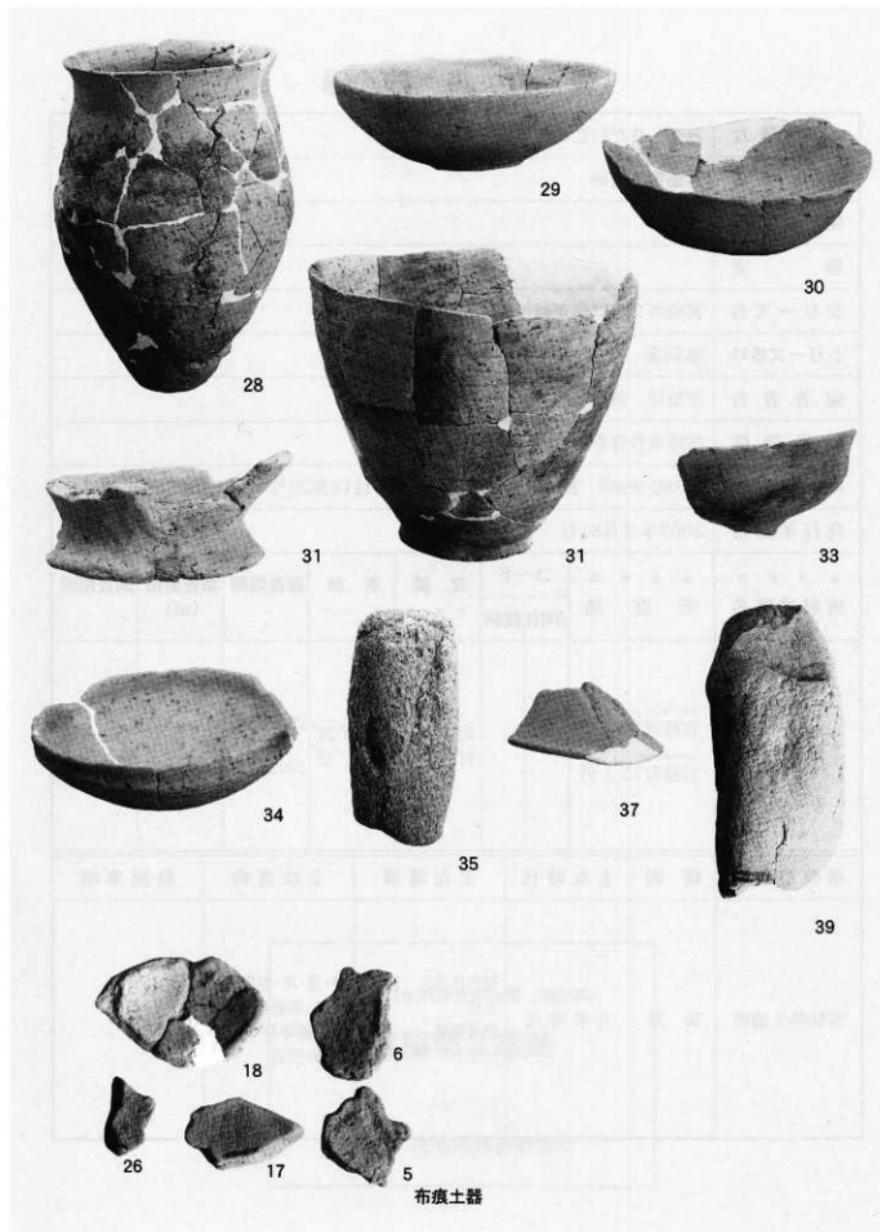
图版12
8号住居完掘状况



图版13
9号住居完掘状况



图版14 出土遗物(1)



图版15 出土遗物(2)

報告書抄録

ふりがな	みやわきだいにいせき						
書名	宮脇第2遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第55集						
編著者名	宇田川 美和						
編集機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL(0985)25-2111						
発行年月日	2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
みやわきだいにいせき 宮脇第2遺跡	みやざきけん みやざきし 宮崎県宮崎市 みやわきちょう ほか 宮脇町72-1 外	市町村 45201	31°54'37" 付	131°26'20" 近付	2002.09.17 ~ 2002.11.14	約170m ²	更正保護 施設改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宮脇第2遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居址 11軒 土坑 4基 溝状遺構 2条 ピット 45基	壺・壺・壺・刻書土器 高壺・布痕土器・ 須恵器壺身・壺蓋・ 支脚・凹石			

宮崎市文化財調査報告書 第55集

宮脇第2遺跡

2003年3月

発行 宮崎市教育委員会